

# CATの国別分析

(世界の主だった削減努力分担の研究の総まとめした分析)

Country	Rating	Share of Global Emissions
<a href="#">China</a>	Medium	24,03%
<a href="#">United States</a>	Medium	15,54%
<a href="#">European Union</a>	Medium	10,78%
<a href="#">Russia</a>	Inadequate	4,89%
<a href="#">Japan</a>	Inadequate	2,88%
<a href="#">Brazil</a>	Medium	2,13%
<a href="#">Indonesia</a>	Medium	1,60%
<a href="#">Canada</a>	Inadequate	1,53%
<a href="#">Mexico</a>	Medium	1,42%
<a href="#">South Korea</a>	Inadequate	1,42%
<a href="#">South Africa</a>	Inadequate	1,24%
<a href="#">Australia</a>	Inadequate	1,21%
<a href="#">Ethiopia</a>	Sufficient	0,20%
<a href="#">New Zealand</a>	Inadequate	0,17%
<a href="#">Morocco</a>	Sufficient	0,15%
<a href="#">Switzerland</a>	Medium	0,12%
<a href="#">Norway</a>	Medium	0,11%
<a href="#">Singapore</a>	Inadequate	0,06%
<a href="#">Gabon</a>	Not rated	0,01%

## ブラジル CAT分析: 中庸

- ・2025年に2005年比で37%削減、示唆的に2030年に2005年比で43%削減(→5年間の約束期間を推進)
- ・目標案は国内努力で実施するが、先進国からの支援は歓迎する(→支援を条件とした目標案なし)
- ・再エネベースのエネルギーシステムへ移行し、今世紀末までに脱炭素化をはかることに努力する
- ・衡平さ:2020年目標よりも進化している(→目標の進化)
- ・一人当たりCO2排出量は、2004年に14.4tだったが、2012年には6.5tを達成(EU2030年並み)。2025年には6.2t, 2030年には5.4t
- ・2004年～2014年の間に森林伐採率を82%低下させたことにより、排出量を相当量減少させた。2030年に違法伐採率ゼロをめざす
- ・再エネがエネルギーミックスに占める割合は40%(電力比率75%)、世界平均の3倍、OECD諸国平均の4倍。2030年には再エネ比率45%を目指す。水力28%から33%へ、その他風力・バイオマス・太陽光を最低23%へ、エネルギー効率改善10%

## インド

### CAT分析： 中庸

- ・気候正義と、条約の下で「衡平性」と「共通だが差異ある責任と能力」原則に基づいた、効果的で協力的、衡平なグローバルな仕組みの構築が目的
- ・2030年に2005年比で、GDPあたりの排出量を33~35%削減（\* 2020年には2005年比で、GDPあたり20~25%削減）
- ・再エネ35GW(2015年)から175GW(2022年)へと急増させる、太陽光20GWから100GWなど
- ・引き続き石炭依存、しかし石炭火力(現状設備容量167.2GW、60, 8%)の高効率化、既存144か所効率化義務化
- ・衡平さ: 一人当たりCo2排出量は1.56t(2010年)、先進国は7~15t
- ・インドは世界人口の17.6%を占め、30%が貧困層、24%無電化